飛鳥水落遺跡・石神遺跡発掘調査現地説明会資料

1981年11月14日　　奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部
西口寿生

はじめに

飛鳥寺の北、雷丘の東方の水田地帯は天武天皇の飛鳥浄御原宮跡に推定されている。しかし、今回の調査地である小字石神・水落の水田の他は飛鳥小学校北の石敷遺構が一部調査されているだけで、本格的な調査はなされておらず、近年、飛鳥板蓋宮伝承地の調査の進行により、その上層遺構を浄御原宮とする説が出され、この飛鳥浄御原宮推定地の調査による解明が待たれている。

今回は、その調査の手始めとして、須弥山石・石人像の出土した小字石神の水田（石神遺跡と仮称する）と、9年前に家屋新築に伴なう事前調査の際検出した、史跡飛鳥水落遺跡の調査を、本年9月3日から並行して実施してきた。調査面積は、水落遺跡約850㎡、石神遺跡約1000㎡である。なお、現在調査を継続中であり、特に石神遺跡では未だ不確定な点があり、今後の調査による変更、追加もありうる。

［水落遺跡］

飛鳥水落遺跡は、昭和47年に、家屋新築の事前調査により、方形にめぐる石組状遺構とその内側に建つ礎石建物、南辺石組溝に南接する掘立柱建物を検出した。方形にめぐる石組溝は、礎石建物の基壇化粧にあたり、その特異な構造から、史跡に指定された。今回の調査は、その整備（基壇化粧を露出展示する予定）のための資料を得る目的で、基壇上面と基壇北辺・東辺の調査を行なった。

調査の結果、正方形の基壇上に建つ礎石建物は、東西・南北それぞれ4間（約11,2m）の方形の総柱建物であることが判明した。検出した柱穴は、いずれも径1～1,5mの不整円形で、壁が斜めになっていることから、礎石の抜取穴とみられる。中央の柱位置の抜取穴だけは1,5～2mとひとまわり大きな長方形で、中に多くの石が投棄されている。柱間はすべて約2,8m等間で、基壇裾までは約5,6mである。正方形4間の総柱の建物の例は他になく、その性格は明らかでないが、いわゆる楼閣建物とみられる。基壇化粧も他に例をみない構造で、約0,6～1m大の自然石を3～4段に積み、約17～20°の斜面をつくっている。現状では高さ約0,6m残っている。その外側には、同様の石で幅1,8mの平面を築き、更にその外側も外堤状に斜面でたちあげている。溝状の底面は、東南隅が高く、西北隅に低い。西北隅では、外側の斜面は北折し、さらに西折して西方へのびており、ここで排水しているとみられる。溝状をなす基壇裾まわりの堆積土は粘土であり、流水を示す砂はない。堆積土からは多くの焼土、炭、鉄滓、フイゴ羽口と共に7世紀中葉の土器が出土し、わずかに7世紀後半代の土器と瓦片が入っていた。これらの遺物は、建物に伴なうものとは考えられず、その年代から、建物の造営年代を推定することには問題がある。又、瓦片は極く少量であり、この礎石建物は瓦葺きであったとは考えられない。

南辺の外堤上には掘立柱建物がある。建物は、北の礎石建物と柱筋をそろえた6間分が検出されていたが、今回東に1間のび、妻柱も検出されたことから、桁行8間、梁行2間の東西棟であることが判明した。柱間は北の礎石建物と同様約2,8m等間である。掘立柱建物は、外堤状斜面に近接して建てられており、柱掘方・側石掘方・側石痕跡の重複関係から、北の礎石建物と一連の建物とみることができる。なお、それぞれの建物柱位置と現存する側石の高さとを手懸りにして、それぞれの基壇高を推定すると、礎石建物の基壇斜面上端が裾から2,8mの位置まであるとすると現状よりなお40㎝高いものと考えられ、南の掘立柱建物と約40㎝の比高をもつものとみられる。

［石神遺跡］

石神遺跡は、明治35年秋に、「須弥山石」・「石人像」が掘り出された水田で、当時の聞き書きによる報告では、水田の西北隅に「須弥山石」の3個の石が相接してあり、「石人像」は少し離れて倒れ伏していた。昭和11年春には、その出土地を中心として関連の遺構を探るべく、帝室博物館の石田茂作氏らにより部分的な調査が行なわれた。この調査では出土地のまわりには、石組の溝がめぐり、その東方に石敷遺構が広がっていることが確認され、須弥山石・石人像が、石組溝をめぐらせた饗宴場に配されたもので、斉明紀に記された須弥山にあたるものと推定された。

奈良国立文化財研究所

しかし、なにぶんにも部分発掘であり、その後の成果により、調査地の水田が飛鳥寺寺域北西隅に近接し、飛鳥寺西門の西を通る中ッ道と、壬申の乱の記事に見える「飛鳥寺北路」の交点が調査地の東南隅にあたるなど、新たな視点で全面発掘することにより、飛鳥京域の地割の問題、須弥山石・石人像出土地の様相、周辺に広がる石敷遺構の性格の解明にせまるべく、今回の調査を計画した。

現在、調査途中であり、充分に解明されてはいないが、大きく(1)石組溝と須弥山石・石人像、(2)石敷遺構と掘立柱建物 A、(3)その他の掘立柱建物、(4)先後の遺構の四つに分けて調査の現状を報告する。

(1)石組溝A～Dは、昭和11年の調査で検出された遺構で、0,6～1m大の花崗岩を1～3段に積んで築かれている。A・Bの底には20cm大の玉石が敷かれ、石田氏の調査ではさらに西へ延び、北折することが確かめられている。Dは幅60cmと狭く、底石も大きめの石を1枚敷き、Aとの間に約10cmの落差をつけている。Cは、底に玉石を敷かないが、側石の組み方からみて、A・B等と一連の溝と解される。Aから東へ7mの所でカーブし北流する。これらの溝中には清砂が堆積していたとされるが、先の調査で完掘されており、出土遺物から年代を決めることができなかった。これらの石溝で囲まれた部分に須弥山石・石人像があったわけであるが、その大半は先の調査が深く及んでおり、出土状況や当初の位置については確認できなかった。ただ幸いにも、西壁ぎわの未調査地で花崗岩の薄層が長径約120cm、短径100cm、巾7～14cmのドーナツ状に残存する部分を確認した。これは、その形状を出土品と比較した結果、須弥山石の下から第一石目の上端と考えるのが最も妥当である。すなわち、倒立して存在していたわけで、この痕跡は、造立当初の原位置を保つのではなく、その後の移動を受けたあと、明治35年に掘り出されるまで存在した痕跡と考えられる。

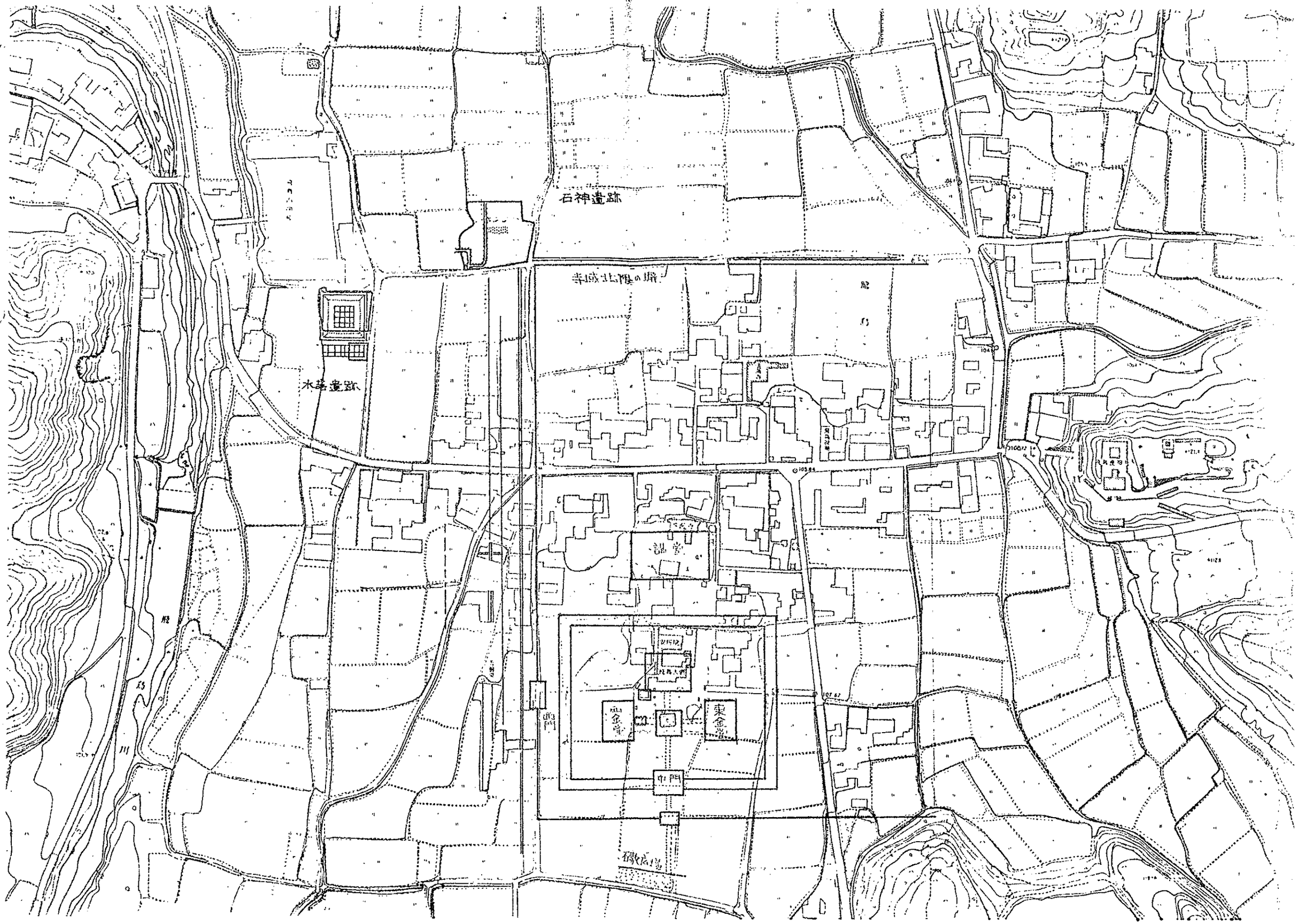
(2)調査区の北半、石組溝Cの東には、10～20cm大の河原石を敷いた石敷遺構がある。調査区北端に残存した状況では、石敷遺構が、石組溝Cの上を渡っており、石組溝Cの埋没後、整地して築かれていることがわかる。石敷遺構の南にある掘立柱建物Aは、東西10間以上（柱間約2,2m等間）、南北1間（柱間約3,9m）の細長い東西棟建物で、西端の柱穴が石組溝Cの側石を壊していることから、石組溝Cよりも新しい建物である。また、この掘立柱建物Aと石敷遺構は共に ㄱ形に曲がる南北溝Bと、調査区中央を東西に流れる自然流路とにより壊されていて、互いに関連をもつ遺構である可能性が高い。自然流路の中には多量の飛鳥寺の所用瓦と共に8世紀前半代の土器が、溝Bには藤原宮期の土器が含まれており、この建物の年代を7世紀後半代に求められよう。建物の周囲を石敷で舗装するような遺構は、飛鳥板蓋宮伝承地の上層遺構で一般的にみるあり方であり、先の推定と矛盾しない。

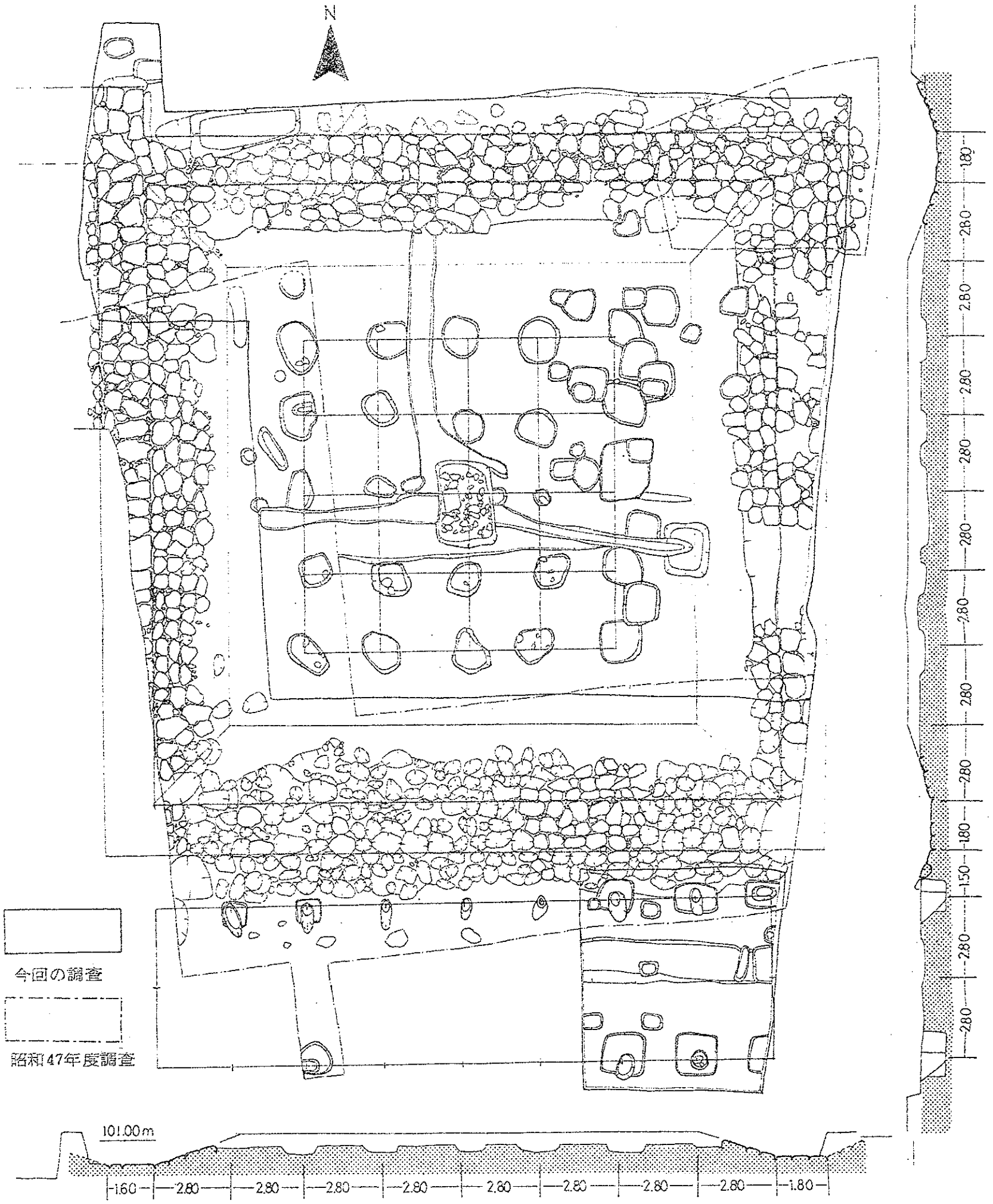
(3)調査区の東南には掘立柱建物Bと掘立柱塀Cがある。掘立柱建物Bは、東西3間（1,76m等間）、南北2間以上（柱間約2,4m）の南北棟とみられる。先の掘立柱建物Aとの関係は明らかでない。掘立柱建物Cは、東で北へ約17°振れる塀で2間分を検出した。これもその時期を決められない。

(4)飛鳥時代以降の遺構には、先の自然流路・溝Bの他に、東西溝A、自然流路上に掘られた東西溝Cがある。溝Bの東には平安時代9世紀代の黒色土器が出土した土壙がある。これは、一辺3m弱の不整方形で、井戸である可能性がある。

飛鳥時代以前の遺構には、弥生時代前期の土壙と、その北に弥生時代中期初頭の竪穴住居、及び調査区東北隅にある5世紀代の竪穴住居2棟がある。弥生時代の竪穴住居は一辺3m弱の隅丸方形を呈する。5世紀代の竪穴住居は、一辺4,4mの方形で南西隅に近く、焼土が多かった。埋土から、土師器甑等の土器が出土した。

最後に、今回の調査成果をまとめ、二・三の問題にふれておく。(1)石組溝は須弥山石・石人像を囲む位置にある一連の導・排水施設とみられる。検出した須弥山石の痕跡は明治年間に掘り出されるまで存在した位置であり、今後、その周辺を精査し当初の位置を追求しなければならないが、出土状況の聞き書きによる限りは、さほど遠方から運ばれたとは考えられない。その性格については、辺境の者を饗応する際に須弥山を造立した斉明紀の記事に注目し、飛鳥寺西、甘橿丘東川上の地に含めてとらえられてきた。斉明6年条の石上池辺についても、石上（いそのかみ）を石神（いしがみ）とみることができれば、その候補地とみられないこともない。西方あるいは北方での調査を期したい。(2)石敷遺構は南の掘立柱建物Aと一連の遺構とみられ、年代は8世紀前半より古く、あるいは7世紀後半に属する可能性がある。しかし、掘立柱建物Aは、調査当初に想定した中ッ道を閉ざす位置にある。このような知見をふまえて、中ッ道の遺構についても、今後検当を深めていきたい。

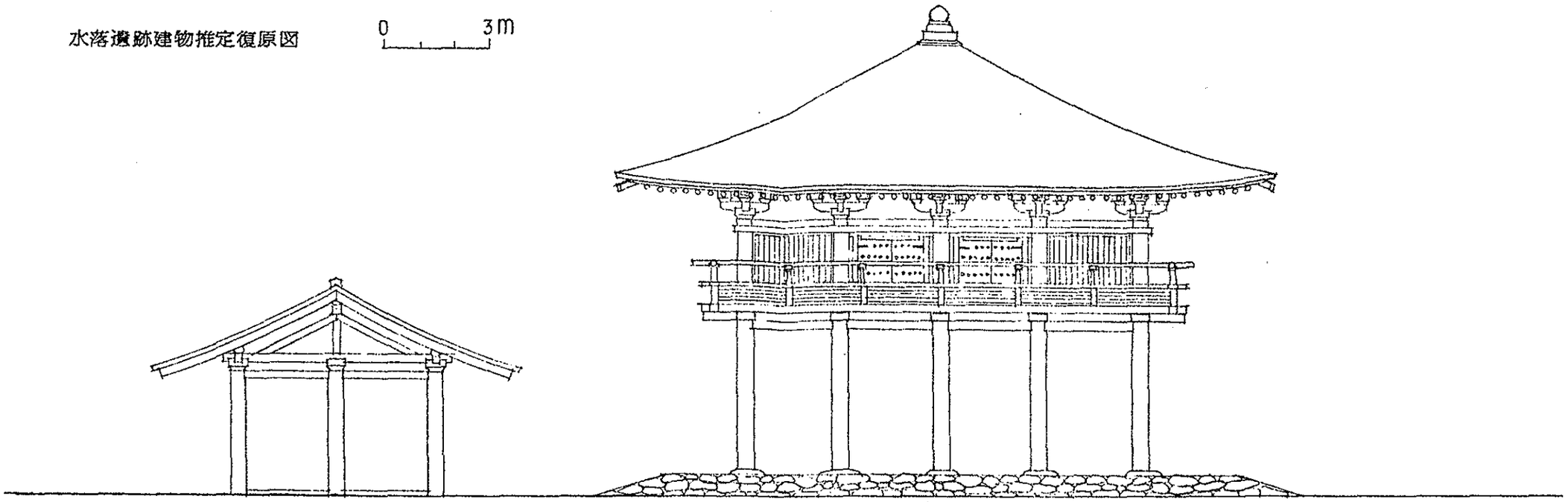

石神遺跡
水落遺跡
中門
東金堂
西金堂



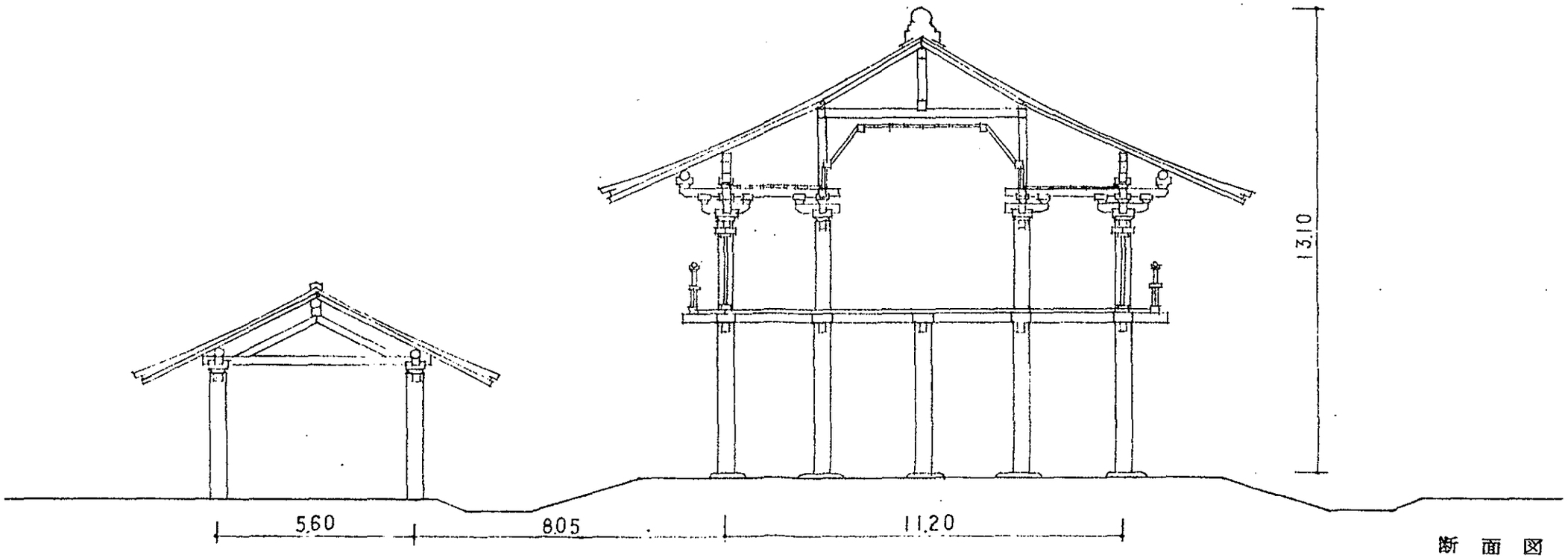
飛鳥水落遺跡発掘遺構図

水落遺跡建物推定復原図

0　3m



東立面図



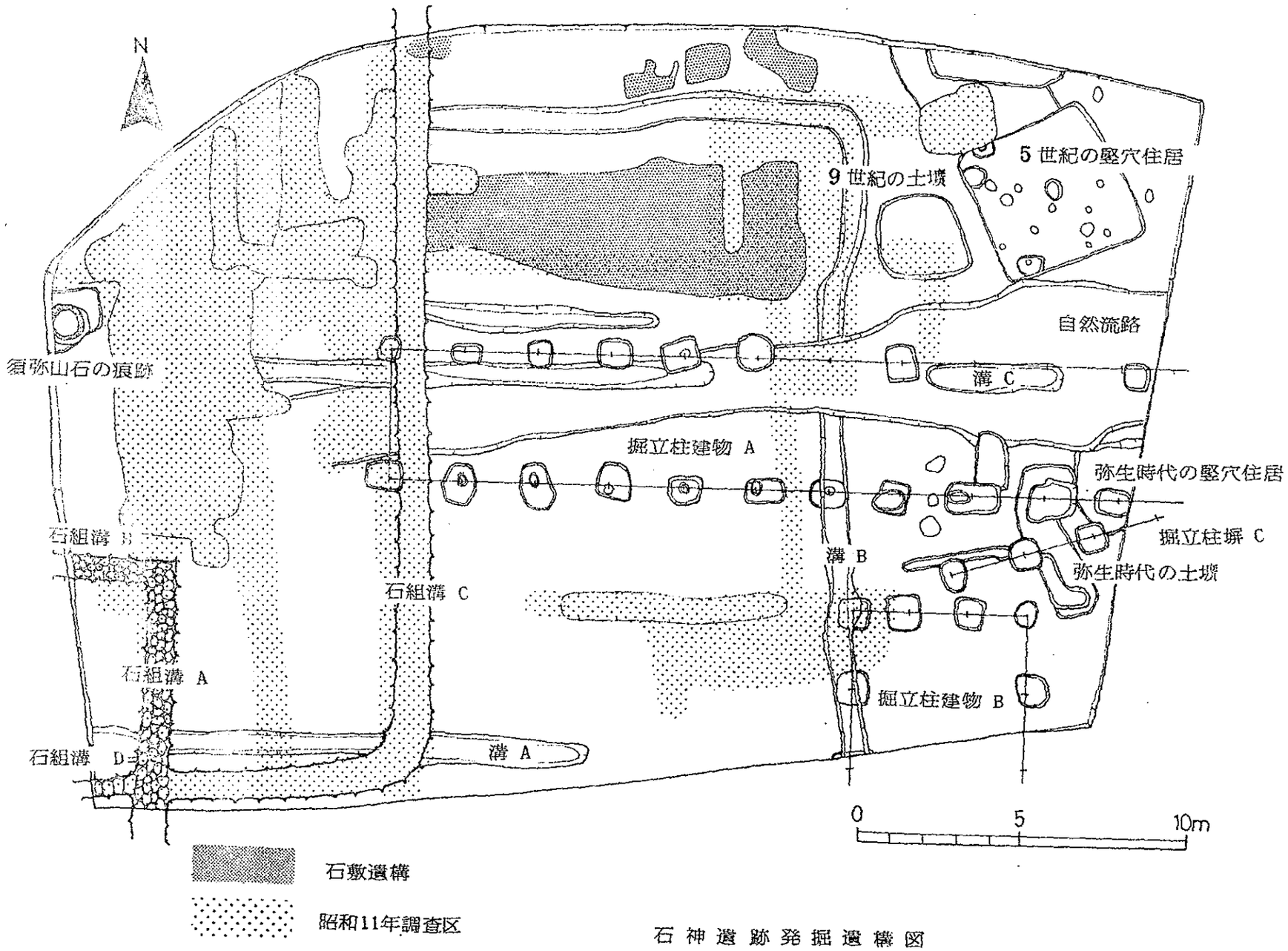
断面図

〔推古二十年是歳〕百済より化来る者有り。（中略）然るに其の人曰はく、「（中略）臣、小なる才有り。能く山岳の形を構く（中略）」といふ。是に其の辞を聴きて棄てず。仍りて須弥山の形及び呉橋と南庭に構けと令す。時の人、其の人を号けて路子工と曰ふ。亦の名は芝耆摩呂。

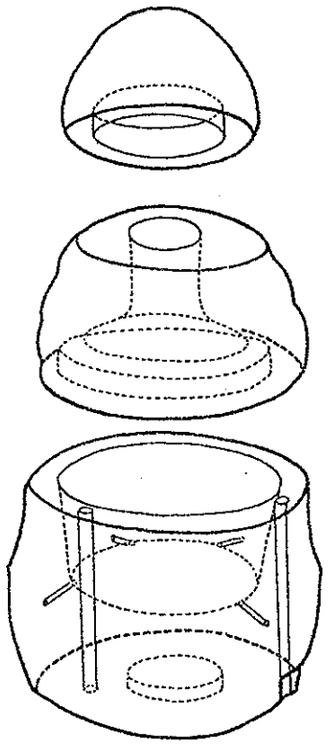
〔斉明三年七月十五日〕須弥山の像を飛鳥寺の西に作る。且、盂蘭盆会設く。暮に都貨羅人に饗たまふ。或本に云はく、覩羅人といふ。

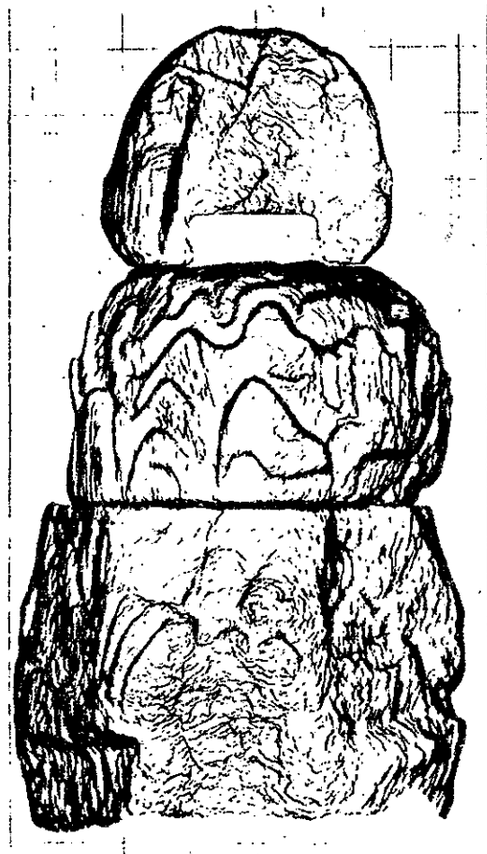
〔斉明五年三月十七日〕甘橿丘の東の川上に須弥山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

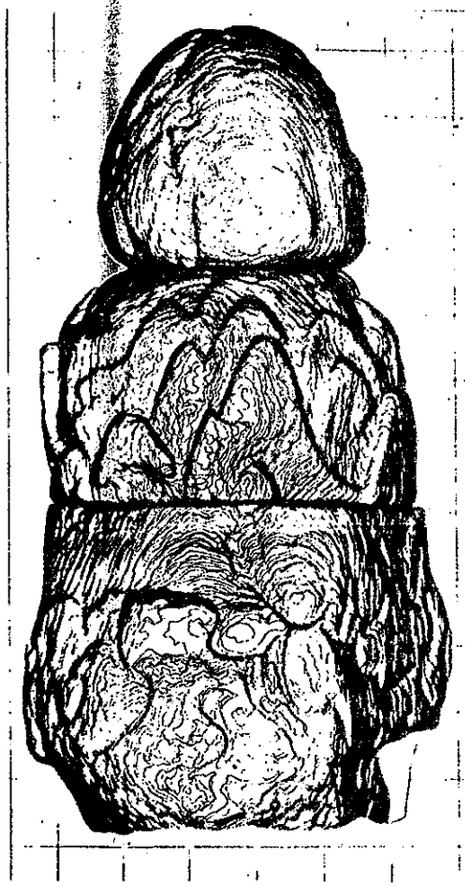
〔斉明六年五月〕又、石上池の辺に、須弥山を作る。高さ廟塔の如し。以て粛慎四十七人に饗たまふ。

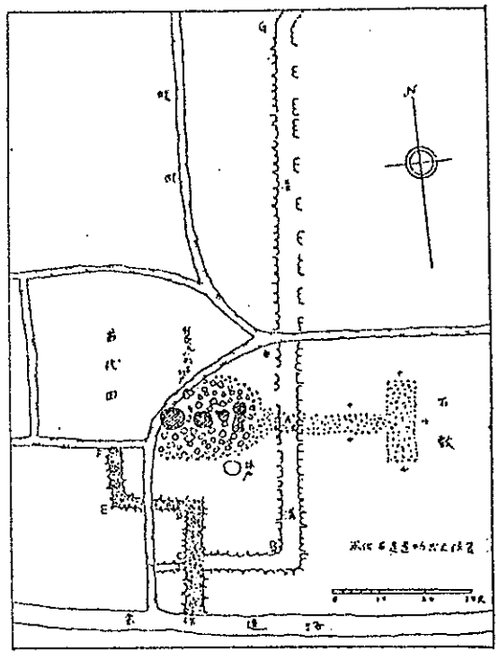
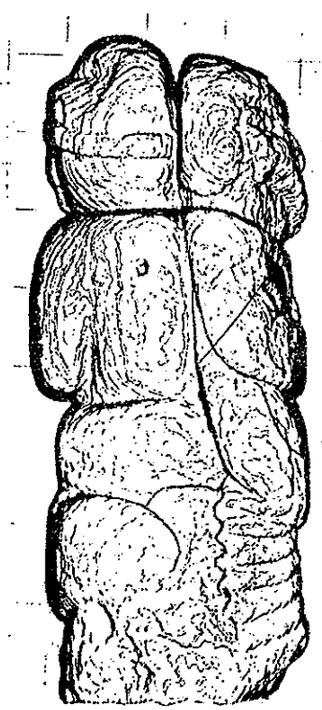


石神遺跡発掘遺構図









第 132 図　須弥山遺跡発掘実測図